

フォーラム委員からの調査報告

- 報告1 主担当:菅生早千江(国際日本語普及協会)
「実践研究」に関する関係機関の取り組み
- 報告2 主担当:高木美嘉(早稲田大学)
学術雑誌、紀要等における「実践研究」の規定
- 報告3 主担当:古屋憲章(早稲田大学)
日本語教育実践を対象とする記述の流れ

報告1:

「実践研究」に関する関係機関の取り組み

主担当:

菅生早千江(国際日本語普及協会)

報告1:「実践研究」に関する関係 機関の取り組み

これまでの実践研究の系譜をたどって見たら？

- ・実践研究フォーラム2011年は第8回

→ 初年度は ? 2004年

立ち上げの経緯は？ その前は？

- ・日本語教育学会(研究集会)実践研究発表会
「私の工夫、私の失敗」

→ 初年度は ? 1998年

立ち上げの経緯は？ その前は？

報告1:「実践研究」に関する関係 機関の取り組み

- 資料の“発掘”

→『実践研究の手引き』

(2001)

財団法人日本語教育

振興協会(日振協)

実践研究プロジェクト

チーム



日振協の取り組みに注目

取り組み開始は？

1994年



報告1:「実践研究」に関する関係 機関の取り組み（年表1）

平成	西暦	財団法人日本語教育振興協会 （日振協）/ 日本語学校関係	日本語教育学会 / 研究機関関係
元	1989	日本語教員研究協議会を開催	
5	1993		・日本語教育方法研究会(JLEM)設立
6	1994	・日本語教員研究協議会において 「実践研究発表」実施	
7	1995		
8	1996		
9	1997	・日本語教員研究協議会において「実践研究発表」実施 ・「教材開発・カウンセリング等、研究協力校による実践的な教育・研究推進の事例発表並びに自主研究の発表を中心とした研究協議」を焦点 「第1回日本語教育セミナー」開催	・『日本語教育』95号より 投稿カテゴリーに 「実践報告」「調査報告」を新設

報告1:「実践研究」に関する関係 機関の取り組み（年表2）

平成	西暦	財団法人日本語教育振興協会 (日振協) / 日本語学校関係	日本語教育学会 / 研究機関関係
10	1998	・第2回日本語教育セミナー開催「充実した実践研究方法の模索」を今後のテーマに決定（実践研究ワークショップ）	・実践研究発表会 「私の工夫・私の失敗」
11	1999	・実践研究プロジェクト・基礎日本語教育研究プロジェクト発足	・実践研究発表会 「続私の工夫・私の失敗」
12	2000	・「実践研究フィールドマップ Ver.1」発行 ・「実践研究プロジェクト成果報告書」発行	・実践研究発表会 「私の工夫・私の失敗3」
13	2001	・「実践研究の手引き」刊行 ・第1回実践研究ワークショップ開催	・実践研究発表会 「私の工夫・私の失敗4」

平成	西暦	備考: 高等教育機関の動き
4	1992	<ul style="list-style-type: none"> ・神田外語大学大学院言語科学研究科博士前期課程 日本語学専攻開設(キャリア入試(社会人入試)あり) ・お茶の水女子大学大学院言語文化専攻日本語教育コース 開設(社会人入試あり)
8	1996	<ul style="list-style-type: none"> ・麗澤大学大学院言語教育研究科日本語教育学専攻 開設 (社会人入試あり)
10	1998	<ul style="list-style-type: none"> ・明海大学大学院応用言語学研究科言語教育コース 開設 (社会人入試あり)
11	1999	<ul style="list-style-type: none"> ・拓殖大学大学院言語教育研究科開設(社会人入試あり) ・目白大学大学院言語文化専攻開設(社会人入試あり)
13	2001	<ul style="list-style-type: none"> ・早稲田大学大学院日本語教育研究科開設 ・桜美林大学大学院言語教育研究科 日本語教育専攻開設
17	2005	<ul style="list-style-type: none"> ・獨協大学大学院外国語学科研究科 日本語教育専攻 修士課程開設(日本語教師対象入試あり、1年制、週末・夜間授業あり、地域在住外国人のための運営講座との連携あり)

報告1:「実践研究」に関する関係 機関の取り組み (年表3)

平成	西暦	財団法人日本語教育振興協会 (日振協) / 日本語学校関係	日本語教育学会 / 研究機関関係
14	2002	・日本語教員研究協議会において 「実践研究ワークショップ発表」 実施(4件)	・教育現場からの実践研究発表会 「私の工夫・私の失敗5」
15	2003	・日本語教員研究協議会において 「実践研究発表」実施(4件)	・教育現場からの実践研究発表会 「私の工夫・私の失敗6」 (コーディネーター:才田いずみ先生)
16	2004	・日本語教員研究協議会において 「実践研究発表」実施(2件) ・『月刊日本語』「実践のエキスパー トを目指す個人研究入門」連載 (奥田純子先生:~2005年8月)	・第1回実践研究フォーラム (委員長:細川先生) ・『日本語教育』120号に「フィールドの 学としての日本語教育実践研究」(石 黒広昭)寄稿掲載
17	2005	・日本語教員研究協議会において 「実践研究発表」実施(3件)	・第2回実践研究フォーラム (細川先生) ・『日本語教育』126号で「日本語教育 の実践報告—現場の知見を共有する —」を特集

報告1:「実践研究」に関する関係 機関の取り組み（年表4）

平成	西暦	財団法人日本語教育振興協会 （日振協） / 日本語学校関係	日本語教育学会 /研究機関関係
18	2006	<ul style="list-style-type: none"> ・「日本語教員研究協議会」は「日本語学校教育研究大会」に改称 ・「実践研究ワークショップ」は、「専門能力開発研修」に改称 (大会の自由研究、ポスター発表、デモは実践研究の成果という位置づけ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回実践研究フォーラム (細川先生)
19	2007	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語学校教育研究大会において補助事業研究6件、自由研究3件、ポスター5件発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・第4回実践研究フォーラム (細川先生)
20	2008	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語学校教育研究大会において補助事業研究6件、自由研究5件、ポスター8件発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・第5回実践研究フォーラム (堀井先生) ・「実践研究からの発信:記述・分析、そして共有へ」

報告1:「実践研究」に関する関係 機関の取り組み（年表5）

21	2009	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語学校教育研究大会において補助事業研究6件、自由研究7件、ポスター6件発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・第6回実践研究フォーラム（堀井先生） 「実践を見せる記述・実践が見える分析」 ・国立国語研究所『日本語教育論集』25号において実践研究を特集
22	2010	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語学校教育研究大会において補助事業研究7件、自由研究12件、ポスター7件発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・第7回実践研究フォーラム（堀井先生） 「現場の「問い」を「研究」にする記述・分析」 ・学会春季大会において「実践報告とは何か」パネル開催
23	2011	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語学校教育研究大会において、自由研究9件、ポスター6件発表(予定) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第8回実践研究フォーラム（堀井先生） 「実践・研究・実践研究を問い直す」

報告2:

学術雑誌、論文集及び紀要における
「実践研究」の規定

主担当:

高木美嘉(早稲田大学)

報告2：調査の目的と方法

- 目的：日本語教育における「実践研究」は、学術雑誌、研究会誌及び紀要において実際にどのように規定されているかを概観する。
- 方法：現在公開されている日本語教育及び近接領域の学術雑誌、研究会誌、紀要における「実践研究」の規定と査読基準を収集。

報告2: 収集した資料(計21)

資料1: 日本語教育(言語教育)の領域

学術雑誌(学会・研究会)..... 4

論述集・紀要(大学)..... 5

論述集・紀要(公的機関)..... 2

資料2: 教育学一般の領域..... 8

資料3: 社会言語学／心理学の領域... 2

資料1：日本語教育（言語教育）

雑誌名	「実践」に関する投稿カテゴリー
日本語教育	実践報告
日本語教育方法研究会誌	
小出記念日本語教育研究会論文集	
リテラシーズ(リテラシーズ編集委員会)	
桜美林言語教育論集	教育現場の事例報告・分析
言語文化と日本語教育(お茶の水女子大学言語文化学会)	実践報告
東京外国語大学留学生日本語教育センター論集	
多言語多文化－実践と研究(東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター)	実践報告／実践型研究論文
早稲田日本語教育学	
国立国語研究所論集	
国際交流基金 日本語教育紀要	実践報告

資料2:教育学一般

資料3:心理学・社会言語学

雑誌名	「実践」に関する投稿カテゴリー
教育工学会論文誌(日本教育工学会)	教育 実践研究 論文
大学教育学会(大学教育学会)	事例研究
教育メディア研究(日本教育メディア学会)	実践研究
メディア教育研究(放送大学・ICT活用・遠隔教育センターメディア教育研究編集委員会)	
教育心理学研究(日本教育心理学会)	
教育システム情報学会誌(教育システム情報学会)	実践論文 ／実践速報(研究の位置づけや比較は不要)
OBIRIN TODAY - 教育の現場から(桜美林大学基盤教育院)	教育実践
異文化間教育(異文化間教育学会)	実践 報告
質的心理学研究(日本質的心理学会)	質的方法に基づく 経験的研究
社会言語科学(社会言語科学会)	

実践研究の規定例：言語教育

雑誌名	「実践」に関する論文の規定
日本語教育	<p>実践報告)教育現場における<u>実践の内容が具体的、かつ明示的に述べられているもの。実践の内容を広く公開し、共有することの意義が明確に述べられていることが必要</u>です。</p>
国際交流基金 日本語教育紀要	<p>「実践報告」(教育、教材開発などの<u>実践の目的、特色、経過、成果</u>などについて紹介、分析した報告)</p>
言語文化と日本語教育 (お茶の水女子大学言語文化学会)	<p>調査・実践報告:今後の研究および教育活動に資する内容の調査結果または<u>実践例の報告が明確な根拠および主旨に基づいて述べられているもの。</u></p>
多言語多文化－実践と研究(東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター)	<p>実践型研究論文:従来の「研究論文」における方法論や分析枠組みではとれきれない、<u>刻一刻と変化する現場での実践を対象とし、以下に述べる条件に合致したものとする。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・執筆者自身の経験によるものであること。 ・先行研究を踏まえて現場の状況を客観的に分析。 ・実践のプロセスの記述 ・データ・事例への意味づけ ・実践活動にともなう変容が記述されている ・課題の解決もしくは改善点にむけて分析がなされている

実践研究の規定例：教育学一般

雑誌名	「実践」に関する論文の規定
教育工学会論文誌 (日本教育工学会)	教育実践研究論文 ＝教育実践に貢献できる問題提起と意義があり、学問としての教育実践学を構築していなくても、 <u>研究手法や道具の開発、要因の分析、実践の改善や学習環境づくり、教師の教育実践力について、新たな点があるもの。</u>
教育心理学研究 (日本教育心理学会)	実践研究 は、教育方法，学習・発達相談，心理臨床等の教育の現実場面における実践を対象として、 <u>教育実践の改善を直接に目指した具体的な提言を行う教育心理学的研究を指す。</u>
OBIRIN TODAY - 教育の現場から(桜美林大学 基盤教育院)	<ul style="list-style-type: none">・教育現場における<u>実践を具体的かつ明示的に述べた内容</u>であること。・<u>単なる教育実践の記録ではなく、教育内容を公開し、それを共有する意義が明確に意識されていること。</u>・問題意識をもって今後の課題を論じたり、<u>問題提起や提言</u>をおこなったりするものであること。

報告2：調査の結果から

- 今回調べた日本語教育の学術雑誌、論文集及び紀要における教育実践に関する投稿のカテゴリーは、11件中5件が「実践報告(事例報告)」となっており、「実践研究」という明示的な区分は見られなかった。
- 実践報告では、教育、教材開発などの実践の目的、特色、経過、成果などについて具体的に明示すること、さらにその教育実践を公開することの意義を示すことが求められている。

報告3:

日本語教育実践を対象とする記述の流れ

主担当:

古屋憲章(早稲田大学)

授業報告

授業報告は、ある学習者にどのような学習項目を、どのような教材を使って、どのような教授方法に基づいて行ったか、そして結果はどうだったかをルポルタージュ風に紹介するところに特徴があります。(実践研究プロジェクトチーム、2001、p.23)

仮説検証型実践研究

今後の日本語教育の活動に資する発見や提言などが、教育実践の結果に基づき実践研究としてまとめられた論文もここに含まれます。研究論文では、オリジナリティー、実証性、論理性を特に重視して査読が行われます。(日本語教育学会Webサイト <http://www.nkkg.or.jp/journal/j-kitei.htm>)

仮説検証型実践研究

この場合の実践研究とは、ある理論に基づいて明確な研究課題を設定し、その課題への回答を実践の分析・検討から導くことを通して、理論の検証を目指すものであると言えるだろう。
(森本郁代、2010、p.95)

仮説生成型実践研究A

「フィールドの学としての日本語教育実践研究」とは、(中略)言語教育実践、あるいは日本語教育実践そのものの研究を指す。(中略)基礎科学・他の応用科学と対話的関係を持ちながら、そのフィールド独自の理論を構想する一つの応用科学を志向する。(石黒広昭、2004、p.3)

仮説生成型実践研究A

実践者は不確実な未来に手探りで進もうとするデザイナーである。そのデザイン-再デザインの連続した軌跡を描き、理論化することが実践の研究である。フィールドの学としての日本語教育実践研究はそれを日本語教育実践の場で志向する。(石黒広昭、2004、p.11)

仮説生成型実践研究B

筆者は実践研究を「教師がめざすものに向けて、その時点で最良と考えられる学習環境をデザインし、よりよいと思われる実践を行い、それを実践場面のデータにもとづいて振り返ることによって、次の実践をさらによくしようとする一連のプロセスである」と考える。(舘岡洋子、2010、p. ii)

仮説生成型実践研究B

自身の教育観のもとで、計画し、準備し、実践し、振り返り、改善する、この一連の動きの繰り返しの中で、ある程度、普遍的な「理論(原則)」を生成するのである。(中略)この一連の振り返り、つまり、現場で起きていることを解釈したり理解したりするプロセスそのものを研究と呼ぶことができるだろう。(舘岡洋子、2010、p. ii)

仮説検証型 実践研究

理論に基づく研究課題の設定
→実践の分析・検討
→理論の検証

授業報告

学習者、学習項目、
使用教材、教授方法、
教授結果の紹介

仮説生成型 実践研究

- ・(実践の)デザイン・
再デザインの連続した軌跡、
一連のプロセス
- ・フィールド独自の理論、
「理論(原則)」
- ・実践者の教育観

参考文献

- 石黒広昭(2004)「フィールドの学としての日本語教育実践研究」『日本語教育』120、pp.1-12
- 実践研究プロジェクトチーム(2001)『実践研究の手引き』財団法人日本語教育振興協会
- 舘岡洋子(2010)「【緒言】「実践研究」は何をめざすか」『早稲田日本語教育学』7、pp. i - v
- 森本郁代(2010)「『実践報告』とは何か—知見の共有を目指して— 1. 『実践報告』論文の内容的妥当性の検討」『2010年度日本語教育学会春季大会予稿集』、pp.95-97